

|   |                                |
|---|--------------------------------|
| セッション   | A. 統語論 (2014.3.22 於 北京日本学研究中心) |
| タイトル  | 日本語の主語表示法と「が」の機能               |
| 著者名(所属)   | 山田昌裕 (恵泉女学園大学)                 |
| 連絡先 Eメール  | yamada@keisen.ac.jp            |
| <p>(背景および研究目的)</p> <p>現代日本語において、いわゆる主語に下接する「ガ」は一般的に格助詞として認められている。しかし、「ガ」の振る舞いには副助詞(とりたて助詞)と認めざるを得ない場合もある。本発表では、現代語の「ガ」がどのような経緯で発達してきたのかをとらえ、「ガ」に格助詞と副助詞の2種を認める。その上で、今後の研究課題について考えたい。</p> <p>(検討方法等)</p> <p>現代日本語における副助詞と格助詞の承接状況から、「ガ」が副助詞と同等の振る舞いをすることを確認する。またその証左として、「いつだって生き活きとしているミーナだけれど、舞台の上でこそが本領発揮だった」宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー』、「あっ、あそこの店でいちごが売ってる」(店でいちごが売られている場合)など、ガ格名詞句に下接しない「ガ」をいくつか紹介する。</p> <p>次に、古代語から近代語の散文資料を中心として、主語表示「ガ」の拡大の様相を概観する。</p> <p>(結果および考察)</p> <p>「ガ」の拡がり、係助詞との関わりにおいて、無助詞主語との関わりにおいて、「ノ」との関わりにおいて見られた。副助詞と認められる「ガ」のルーツは、係助詞による強調表現から「ガ」による強調表現形式への変化(「これ見給へ。惟成が落としたりつるぞ」『落窪物語』)や係助詞による疑問表現から「ガ」による疑問表現形式への変化(「臆して耳がつぶれたるか」『曾我物語』)によると考えられる。</p> <p>(結論)</p> <p>山田・中川(1996)によれば、話し言葉と書き言葉における「ガ」の用法(いわゆる中立叙述と総記)の出現の仕方が異なっている。この出現の異なりは金水(2011)でいうところの、地域の言語と広域言語の差異に基づくと置き換えることができると思われる。今後はこのような視点からの「ガ」の出現のあり方を精査することによって、「ガ」に格助詞と副助詞の2種を認めることの有用性が確認されることであろう。</p> |                                |
| <p>参考文献</p> <p>金水 敏(2011) 「日本語史とは何か——言語を階層的な資源と見る立場から——『早稲田日本語研究』20</p> <p>角田太作(1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版</p> <p>山田剛一・中川裕志(1996) 「助詞・無助詞の意味と役割」『情報処理学会第52回(平成8年前期)全国大会』</p> <p>山田昌裕(2010) 『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房</p>   |                                |